長野市立博物館

博物館だより

第56号

2002.8.10

Nagano City Museum

門前商家ちょっ蔵おいらい館来館者1万人達成!!

昨年4月25日に開館したおいらい館は、4月12日（金）に来館者1万人に達しました。1万人に到達したのは当初予想よりだいぶ早く、開館1周年前でした。

当日は市民ギャラリーで「押し花アート展」（正村敬子・金田清子主催）が開催され、女性の方が多数来館されていました。昨年の4月25日開館当日の招待者等を除いてカウントし、1万人目の方は市内の北沢恵美子さんでした。鷲澤市長から記念品を贈呈し、記念写真を撮りました。合わせて1万人目の前後の方にも市長から記念品が贈呈されました。

おいらい館の今年3月までの利用をみると市民ギャラリーは約95%、多目的室は約44%の利用状況でした。市民ギャラリーは年間を通じて利用されたことがうかがえます。平成13年度は52件の団体・個人の利用があり、さまざまな学習活動や創作活動の発表の場として役割を果たしていると思われます。初めて来館される方も多いのですが、数回来ているという常連さんも増えています。また、中庭に山野草を持参していただいた方もあり、いろいろと皆さんに助けていただいています。歴史的な建物空間で人と人とが触れあえる場をさらに創出していきたいと思います。（山口　明）

第47回特別展 海と大地の物語－古日本海と信州の海－

【8月4日(日)～9月23日(月)】

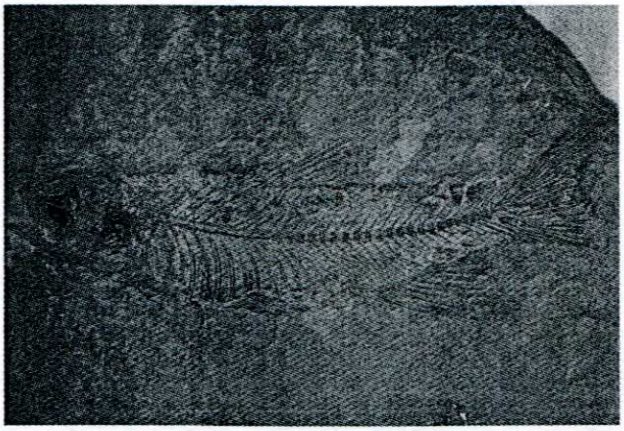
日本海といえば皆さんはなにを思い浮かべますか？イカやアマエビなどの海の幸、海水浴の思い出、美しい夕日など、思い浮かぶことは人それぞれでしょう。でも、長野で暮らしている私たちにとって日本海はそれほど身近な存在ではないかもしれません。ところが、私たちが生活している長野の大地は、かつて大半が日本海の海底だったのです。

日本海はとても特殊な海です。太平洋などの外洋とは対馬海峡や津軽海峡など５つの海峡でつながっていますが、いずれも狭くて極めて浅い水深しかありません。このため、日本海は、海面近くの表層水を除くと、周囲の海から完全に孤立しています。日本海沿岸部の表層（海面から約200mまでの部分）には、対馬海峡から流入する暖流の影響を受けた、暖かい海水が分布し、そこにはマグロなどの南の海から回遊してくる魚や、タカラガイ類など暖かい海に特徴的な貝も生息しています。しかし水深200m以深には、「日本海固有水」という、周囲の海から孤立している日本海特有の海水が分布しています。日本海固有水は、水温が２度以下の極めて冷たい海水で、そこにはタラやズワイガニ・ホッキガイなど、冷たい海だけに見られる生物たちが生息しています。寿司や刺身でおなじみのアマエビも、日本海固有水でくらす生き物です。

このような日本海の生物と海水の関係は、時代ごとに大きく変化してきました。化石の研究によると、暖流が強く流入した時代には熱帯や亜熱帯の生物の化石が多くなり、暖流の流入が途絶えた時代には冷たい海の生物の化石ばかりになったことがわかっています。海面が約100mも低下した氷河時代には、海峡が干上がって日本海が「湖」になり、その影響で多くの生物が死滅したこともありました。

ところで、日本海は太古の昔からそこにあった海ではなく、約1600万年前にできた新しい海です。かつて、日本列島はユーラシア大陸にくっついて、日本海は存在しませんでした。それが、約2000万年前に大陸東縁部に多くの裂け目ができて拡大を始め、そこに海水が進入したことによって日本海と日本列島ができたといわれています。「大陸移動」の日本海版です。このときの激しい地殻変動によって、長野県も大半が海底になりました。信州に広がった海は、その後日本海の一部として変遷をたどり、約170万年前に新潟県側へ退きました。

今回の特別展では、現在の日本海の生物や日本海ができた約1600万年前以降の各時代の化石・信州の日本海の化石などを展示して、日本海とはどんな海か、そして大昔の信州にも広がっていた過去の日本海はどうであったかをたどります。信州が遠い昔に海だったことを思い浮かべながらご覧いただきたいと思います。　（畠山幸司）



▲淡水魚化石（成巽閣蔵）

日本海形成運動が始まった約2000万年前、日本列島の日本海沿岸地域にも海底拡大によって生じたくぼ地が広がっていました。しかし、まだ海とつながっていなかったので海水が進入しておらず、川から流れてくる水がたまって大きな淡水湖となっていました。

この化石は当時広がっていた淡水湖に生息していたもので、同様の淡水魚化石が日本海沿岸各地や長崎県壱岐などから見つかっています。

江戸時代に加賀前田家へ献上された化石です。

記念講演会のお知らせ

「フォッサマグナと信州の大地の生い立ち」
講師　小坂共榮氏（信州大学理学部教授）
日時　９月１日（日）午後２時から
会場　当館２階会議室　　聴講無料

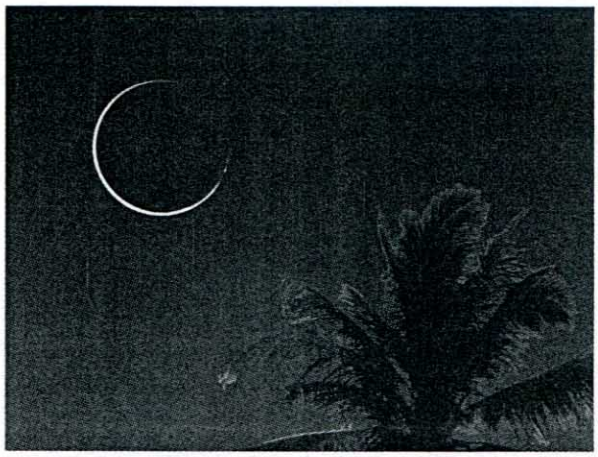
南の島テニアンの金環と星

【金環日食】

6月11日早朝、日本全国で部分日食が起こりました。この日食は日本の遥か南の北太平洋を横断する金環日食に伴うものでした。金環日食帯はほとんどが洋上を通っていますが、運良くサイパン島南端とサイパン島のすぐ南にあるテニアン島の大部分を通っています。そこで、金環日食を見るためにテニアンへ出かけていきました。

中心食は皆既日食と金環日食があります。それらは食が起こるときの太陽と月の見かけの大きさによって決まってきます。今回はほんのわずか月の方が太陽より小さく、観測地での食分は0.990と、極めて1に近い値です。食分が1だと太陽と月が同じ大きさという事になり、皆既日食は食分が1以上になります。テニアン付近での金環食帯の幅も47kmしかなく、これらの条件から、かなり細く、継続時間が短い金環食が見られました。

テニアンの時間はGMT+10、つまり、日本より1時間だけ進んでいます。現地時刻午前7時02分に欠け始めました。そのころは太陽のまわりにあまり雲はなかったのですが、次第にあちこちから雲がわき出してきてときどき月を隠すようになり、7時50分過ぎに完全に雲に覆われてしまいました。半ばあきらめ気味だったところ、幸運なことに金環日食が始まる約10分前の8時ごろから雲がなくなってきました。金環食に合わせたかのように見事な青空が広がっていました。8時11分、少し暗くなったかと思うと太陽がリング状に変身しています。フィルターを通してみる太陽は簡単に壊れそうなくらい細くなっています。まぶしいながらも肉眼で指輪のような太陽が見えていました。しかし、これだけ細くても太陽の光は肉眼で長く見られるのを拒んでいるかのような強烈な光を放っています。これが金環日食！わずか数十秒の金環日食があっという間に終わりました。



▲テニアン島の金環日食（椰子の木と合成）

【南十字】

テニアン島でのもう一つの収穫は南十字星が見られたことでしょう。北緯15度ですから、晴れていれば南十字星は簡単に見えるはずです。しかし季節が重要です。テニアンの緯度ですと南十字星の一番南の星が南中時で12度まで昇ってきます。ただ、宵のうちに見られるのは春から初夏にかけてです。6月という時期と日食時は必ず新月という幸運にも恵まれ、テニアンで最高に美しいといわれているタガビーチにて南十字、そして太陽系に一番近い恒星ケンタウルス座アルファ星をはじめとするケンタウルス座全体とも出会うことができました。　（大蔵　満）

▲南十字星とケンタウルス座アルファ星、ベータ星

特別公開　長野市指定文化財

羯磨金剛（かつまこんごう）

善光寺世尊院蔵
7月20日(土)～8月25日(日)

写真は善光寺大勧進の世尊院に伝わる羯磨金剛（かつまこんごう）と呼ばれる法具です。こうした法具は儀式を行う人に特別な力を授け、成就を助けると考えられています。現在も大勧進ではお彼岸に別の羯磨を使って法要が行われています。制作は室町時代中期。大きさ縦・横12.5cm。重さ296g。　（降幡浩樹）

「私のたからもの」展の開催に向けて【10月12日(土)～11月24日(日)】

◆開催の趣旨

「私のたからもの展」は同じタイトルでこれまでに博物館友の会主催で5回にわたって開催してきました。この展示会は、個々の「たからもの」を並べることが本来的な目的ではなく、出品の集約、搬入・搬出、展示飾り付けなど種々のプロセスを通じて、会員相互の連帯と交流の場を展示会に求めようという趣旨から出発したものでした。

しかしながら出品者・出品件数など友の会の枠だけでは限界だと感じています。

博物館の空間というのは、一方的に展示を見せる場ではなく情報を共有しあう場だと考えています。文化的な拠点として人と人とが交流することで市民文化が醸成されてくると思います。従ってこのたからもの展の「場」というのは当初の趣旨にもあるように無限の可能性を秘めていると感じています。

これまでの友の会主催の展示会は第1段階であったと位置づけ、友の会の枠を取り払い、出品対象を市民全体に呼びかけて実施することが発展的な形態になると考えています。

◆たからもの展出品者の募集

自分で制作したもの、大事にしているもの、思いでの品、趣味で収集しているものなど皆さんが「たからもの」としているものを一堂に集めて展示会を開催します。皆さんの「たからもの」を博物館に是非出品してください。

◆たからもの展サポーターの募集

企画・準備・展示・運営等にご協力いただける次のような方を募集します。

○博物館に興味があり、ボランティアとして積極的に本展で活動する意志のある方。

○準備段階・展示飾り付け・展示開催日などに参加できる方。

○報酬・交通費・食費の支給はありません。

出品者・サポーターとも8月31日(土)までに電話、ファックス等でご連絡ください。

プロセスを大事にして一つの事業を完成させる達成感、連帯感をみんなで共有したいと思います。

(山口　明)

異界妖怪探訪⑪ ～異界へのいざない～

ひと昔前まで、幽霊が出現する場所といえば柳の木の下でした。最近では学校の怪談がブームになったように、学校のトイレや理科実験室といった場所に幽霊やお化けが現れています。お化け、妖怪、幽霊たちは、時代によって場所を変えながらも活躍の場をこの世界に確保してきました。これはつまり、人はどのような場所や風景を恐ろしく感じるのかということであり、現代の私たちはそれを、夜の学校や廃墟となった病院などに感じるのです。ではもうひと昔前、江戸時代の人々はどのような場所を怖いと思ったのでしょうか。ここでは須坂の町を例に見ていきましょう。

近世の須坂の様子を伝える書物に『三峯紀聞』があります。これは嘉永年中に記された須坂の見聞記です。その中にいくつか妖怪出没の話が載せられており、須坂の中でもいくつかの決まった場所、具体的には勝善寺の黒門付近と太子町加藤某の裏にあった大柿に妖怪が出没していたようです。黒門付近は、「大木森然と立込み昼も昔は小暗くして物凄しき処なり」とあり、夜になると小豆洗いや見越し入道が出現し、大柿付近では突然目の前にヤカンが落ちてくるヤカンつるしや、塗り壁に似た妖怪が現れました。これらの場所は人通りの多い城下町の中で人気がなくて昼なお暗く、そこだけ取り残された異質な空間であったようです。

現代の妖怪が出没する学校は、昼間は人の大勢いる場所ですが、夜になると全く人気がなくなる特殊な場所であり、廃墟は周辺の日常的な風景の中で異質な印象を人に与えます。このように見てくると、妖怪が現れる場の根本的な特徴は時代を超えて不変なのかも知れません。身近にある日常の風景の中にあって、それを惑わすような風景は、見る人を不安にさせ、時には風景の向こう側にある異界へと引きずり込みます。

皆さんの身近なところにもこのような風景があるかもしれません。身近にひそむ異空間を見つけること。それが異界探訪への第一歩です。

(細井雄次郎)